様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２０３９５

研究課題名（和文）価値観としての母親業：その再生産の仕組み

研究課題名（英文）Mothering in Japanese Society: Its Cultural Value

研究代表者
森木　美恵（MORIKI, Yoshie）

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：００５５２３４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、東京での未婚・既婚男女によるフォーカスグループデータの分析から、１）現代日本社会においても母親業は根強く重視されており、２）そのため女性は「我慢を重ねて」でも社会が要求する良い母親の文化的基準に達しようと努力しており、また頑張るべきであると考える傾向にある、３）また、母子接触を重視する価値観から、妊娠・出産・子育て期を通じての継続した女性の労働にはつながりにくい文化的仕組みがある、という知見がもたらされた。今後の女性労働力率の上昇のためには、母親の継続した市場労働を、「子供にとって良いことだ」とする価値観のシフトが必要になるであろう。

研究成果の概要（英文）：This study investigated mothering values and the ways they are expressed in the daily life of Japanese. The analyses of the focus group data reveal marked impacts of mothering on people’s decision making, from such small issues as mothers’ outings alone to those of employment. It is clear that the values of direct and dedicated mothering are firmly internalized so that people try to refrain from activities that separate a child-mother pair. People also tend to try their best, however demanding the requirements might be, to achieve the culturally prescribed standards. The findings of the study provide clues for how Japanese society might cope with a pressing labor shortage and social cries to push more mothers into the labor force, while taking into account underlying cultural values. If women’s labor force participation can be made to look more beneficial for children, people’s attitudes toward women’s employment may become more positive.

研究分野：人類学（人口人類学）

キーワード：母親業　価値観　女性の労働　少子化　夫婦の親密性

１．研究開始当初の背景

日本社会における母親業の重要性は繰り返し指摘されてきたが、価値観としての「母親業」の文化的意味や社会的位置づけに焦点を当てた研究は少ない。女性の社会進出が求められる社会状況であるが、その中で従来的に内面化されてきた「母親であること」の価値観は市場における女性労働にどのような影響を与えているだろうか。本研究は、日本人夫婦のセックスレス調査から得た知見を基に、母親性を重視する文化的仕組みに興味を持ったのが着想のきっかけである。

２．研究の目的

子育ての比較文化的視点より、スモール（2000）は日本の家族は「子供中心」に形成され、特に母親は赤ちゃんを自分の一部のように考え母子の絆を強めることで新生児を家族の、そして、個よりも共同体を重んじる日本社会の一員として文化化していると述べた。また、人口学の観点から（例えばスウェーデン人女性と比べて）既婚日本人女性は仕事よりも母親業により大きな意味を見出しており、保育所増設が必ずしも効果的な少子化対策にはならないと示唆する（小川2005）研究もある。

母親という立場に期待される役割や望ましいとされる母親像は文化によって様々である（Glenn 1994）。日本において母親業に付与されている意義およびその特異性について考察し、少子高齢化に伴う女性労働力率の問題などを解き明かす糸口とするのが本研究の第一の目的である。いわゆる「三歳児神話」が表象する母親のあるべき姿を規定する言説と日常生活における価値観の実践のかかわりに注目する。

また、女性労働に関して時代は変わったと言われ、事実、諸制度においても子を生み育てながら働く仕組みが不十分ながらも構築されてきたなかで、いかにして「母親業」の価値は維持されているのか。具体的にどのような過程を経て価値観としての母親業が獲得され、再生産されるのか。世代間や夫婦間の関係性に焦点を当てながら母親業の再生産の仕組みについて調査することが第二の目的である。これらの目的を通して、日本社会で母親業という価値が担っている文化的機能を探り、可視化されていない構造的な問題を明らかにすることを目指す。

<参考文献>

小川直宏 2005「女性の就業と子育て支援策に関する分析―育児休業取得と保育サービス利用の視点から」『超少子化時代の家族意識』東京：毎日新聞社。

Glenn, Evelyn and others 1994. *Mothering: Ideology, Experience, and Agency.* New York: Routledge.

スモール、メレディス 2000 *赤ん坊にも理由がある*　東京：角川書店。

３．研究の方法

１）母親業についての人々の価値観を探るために、東京においてフォーカスグループディスカッションを合計６グループ各２時間行った。それぞれのグループ構成は、専業主婦、未婚の男女、子供を３人以上持つ男女、フルタイム就業男性、フルタイム就業女性、男女専門自由業、である。各グループにおいて司会は研究代表者が担当した。参加者の選考にあたっては、調査会社所有のデータベースに登録済みの人々を対象に、グループディスカッションのトピックと趣旨を明記した参加申し込みフォームおよび参加資格をスクリーニングするための性別や子供の有無などを問うアンケートを配信した。参加に同意する人のみがスクリーニングアンケートに答え、返信があった人々の中から社会・文化的バックグランドを考慮して研究代表者が各グループにつき６名ずつ参加者を選んだ。

２）タイバンコクにてタイ人の子育てと働き

方に関するフォーカスグループディスカッション（男女、階層別の４グループ）を行った。参加者のリクルーティング方法、参加候補者とのコンタクト、当日の事務に関しては現地のNPO法人と協力して進めた。司会は基本的に研究代表者がタイ語で担当したが、場合によってはタイ人の助手がタイ語と英語で進行の補助を行った。

３）学齢と職歴および母親業の関係をより詳細に検証するために、スノーボールサンプリングによりライフヒストリーインタビューを実施した。母親業と夫婦の親密性の相互関係を知るために被面接者は幼児がいる夫婦とした（東京在住、計３カップル６名）。インタビューは夫婦別々に実施した。フォーカスグループ、インタビューともに内容は参加者・被面接者の許可を得て録音し、テキストに起こした。

４．研究成果

研究の主な成果は、東京でのフォーカスグループデータから、１）現代日本社会においても母親業は、予想していたよりもはるかに根強く重視されている、２）そのため女性は「我慢を重ねて」でも社会が要求する良い母親の文化的基準に達しようと努力しており、また頑張るべきであると未婚既婚にかかわらず考える傾向にある、３）母親の市場労働によって引き起こされると参加者が認識している子供の成長への悪影響に対する懸念や、よりシンプルに「幼少期にはなるべく長い時間母親は子供のそばにいるほうが望ましい」という価値観より、妊娠・出産・子育て期を通じての継続した労働にはつながりにくい文化的仕組みがある、という知見がもたらされたことである。子どもを「きちんと」育てるためには母親と子供はなるべく離れないほうが良いという価値観は、具体的には日常の様々な行動に反映されている。例えば、幼い子供がいる母親の子供を伴わない単独行動は望ましいとされておらず、映画鑑賞やショッピングは当然のこととして、健康維持のためのジム通いや美容院へ行くこと、歯医者への通院にいたっても母親の単独行動は自主的に制限されていた。また、母子のつながりを重視する姿勢は、親子での川の字就寝を望ましいこととして積極的に実施していることからも見て取れた。よって、このような内面化から母親業に専念する他の選択は文化的に発生し難いと考えられる。この点は約２０年前にフランス人研究者が驚きを持って「日本人女性は母親業を仕事として邁進するあまり自分を追い詰めている」（1997）と言及した状況からあまり変化していないと言えるだろう。従来から指摘されているように、子供を重視する家族観はより広い日本の文化的文脈に立脚するものであることを踏まえると、今後の女性労働力率の上昇のためには母親の継続した市場労働を「子供のために良いことだ」とする価値観のシフトが必要になるであろう。

また、予期していなかった発見としては、母子の高い親密性に対して夫婦間の希薄な親密性がデータから浮彫りになったことが挙げられる。母親は基本的には幼児を他人に預けて外出することを好まないため、兄弟の参観日など必要に迫られた場合は夫が母親の代役となっている。そのため、カップルの時間として夫婦で一緒に外出することはフォーカスグループ参加者の間では考えられない事柄であり、また特に望まない出来事として捉えられていた。さらに、カップルとのインタビューデータからは、結婚・出産後に夫婦間のカップルとしての親密性が急速に低減するプロセスが見て取れた。しかし、この親密性の欠如は夫婦の危機を意味せず、逆に子供との時間を重視する結果、家族としての関係性が成熟したと認識されていると分析できる。また、親密性の低下の結果として、第二子に向けての夫婦の営みに戸惑いを覚

えている旨の発言が多々見られた。これらの結果は先行研究であるセックスレス夫婦の現状からの知見とも一致している。

これらの得られた成果は国内外において様々な影響力を持つと考えられる。実際すでにいくつかの国際学会において発表を行っているが、子供重視の姿勢と反面にある夫婦関係の軽視は、国外の調査者からは「結婚」という制度の意味を再考する事例としてインパクトを持つようである。また、国内においては、喫緊の課題である低出生とそれに伴う労働力確保の問題において、女性の継続労働率が未だ低いその原因の大きなものが文化的な要素であると具体的に指摘したことが本研究の貢献であると考える。原因が文化的なことであるとすれば、その解決方法も文化に立脚する必要があり、安易に国外の成功例を適用することは必ずしも望んだ成果を発揮しないと言えるだろう。本研究の成果の一部は、オーストリア大学の研究者編集による書籍の中に含まれて近日出版予定である。また、夫婦間の親密性の希薄さとそれが示唆する事柄については今後「カップル文化の欠如」という視点から検証することも有意義であると考えている。

＜参考文献＞

Jolive, Muriel 1997. *Japan: The childless society? The crisis of motherhood.* London: Routledge.

Moriki, Yoshie and others 2014. Sexless marriages in Japan: Prevalence and reasons. In N. Ogawa & I. H. Shah (eds.), *Low fertility and reproductive health in East Asia* (pp. 161-185). Dordrecht: Springer.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕〔書籍の分担著〕（計　3　件）

① 森木美恵「少子高齢化と老親扶養問題：新たなるタイ社会の課題」、『タイを知るための72章』、綾部正雄（編著）、東京：明石書店、266-269頁、2014。

② Yoshie Moriki, Kenji Hayashi, & Rikiya Matsukura 2014. “Sexless Marriages in Japan: Prevalence and Reasons.” In Naohiro Ogawa and Iqbal. H. Shah (eds.), *Low Fertility and Reproductive Health in East Asia.* (International Studies in Population, Vol. 11). Dordrecht: Springer, pp.161-185, 2014.10.

③ Yoshie Moriki 2012. Mothering, Co-sleeping, and Sexless Marriages: Implications for the Japanese Population Structure. The Journal of Social Science 74:27-45.

〔学会発表〕（計　5 件）

① Yoshie Moriki “Mothering and Work Detachment: Insight into Future of Female Labor Participation in Japan.” International Symposium Family in Transition, 2016.1.23, Waseda University, Tokyo.

② 森木美恵「文化と人口構造の接点：人口人類学」、日本人口学会、2015 年 6 月 6 日、椙山女学園大学、愛知県名古屋市。

③ Yoshie Moriki “Happiness in ‘Endurance’: Impact of Internalized Parenting Norms.” International Conference Deciphering the Social DNA of Happiness: Life Course Perspectives from Japan, 2014.4., University of Vienna, Vienna, Austria.

④ Yoshie Moriki “Impact of Mothering on Demographic Behaviors in Japanese

Society: Labor shortage and the Preference for Parent-Child Co-Sleeping.” XXVII International Union for Scientific Study of Population (IUSSP) Population Conference, 2013.8.28, Korea. BEXCO Conference Center, Busan, Korea.

⑤ 森木美恵「母親業という価値観と少子化対策の互恵関係の関係」第64回日本人口学会、2012年6月2日、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）。

６．研究組織

(1)研究代表者

森木美恵　(Moriki Yoshie)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：　00552340

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし